情報と知識

Information and Knowledge

安永尚志

Hisashi YASUNAGA

人間文化研究機構

National Institute for the Humanities

〒105-0011 東京都港区芝公園3-1-1

yasunaga@nihu.jp

1 祝う

情報知識学会の20周年をお祝い申し上げます。言うまでもなく、この間の社会全般における情報技術の進展とその受容は凄まじいものであった。本会は、基礎から応用に至る諸課題に時機を失うことなく取組み、多くの成果をあげてきた。各種の活動を通じて、多方面へなし得た貢献は高く評価されるものである。とりわけ、SGMLやXMLの啓蒙普及活動並びに研究開発活動は、情報技術分野における先導的な活動であり、高い評価はもとより、果たした役割は特筆される。

当然であるが、本会の果たしてきた役割と成果は、会員諸氏の努力以外の何ものでもない。

ところで、本会のこれからを眺めたときに、少々不安も抱く。裾野は広いが規模が小さい点である（会員数300名程で推移）。人文社会科学から理工学全般に及ぶことが、最大の特徴であり強みでもあるが、個々の専門領域が小さい。したがって、個別領域での成

果をあげ、先導性を確保することは一般に難しい。言わば、専門領域での人不足である。

そこで、分野横断的な課題で勝負ということになるだろうか。これは、大きなメリットであり、本会の今後をも示唆する。言換えれば、異分野間のコラボレーションである。例えば、最近によく文理融合と言われるが、融合による新たなパラダイムの発見と推進である。実際に、このような観点を裏付ける成果も多い。本会が評価され、期待されるところではないだろうか。つまり、本会以外には対応できる組織はそれ程多くないと言える。チャンスなのである。

なお、蛇足ながら、規模の問題は本会運営にとっては大きな課題でもある。

2 情報知識を考える

ここで、少し話題を転ずる。

新たに問うまでもなく、本会は情報と知識に関わる学会である。しかしながら、「情報」と「知識」の個々を対象とする学会かと言うと、単純にはそ

うとも言えないようにも思える。それでは、複合した「情報知識」という新たな命題に関わる学会かというところ、これも断定はできないようにも思える。未だに判然としないが、少し考えてみたい。ただし、極めて個人的な見解かも知れない。

まず、本会の諸々の広報を調べてみた。

「情報」と「知識」であるが、これらが実は明確に定義されていないようだ。本会の出版物やホームページをみても、情報や知識そのものについては触れられていない。用語としての意味、定義、あるいは語源などが未定のようなのである。また、相互の関連も明確ではない。

本会のホームページの活動内容の概要の中で、本会の業務の1つに「データ・知識・情報の本質に関わる理論、その応用課題などに関する研究交流の場の提供」とある。情報や知識は、既存の概念として先験的に与えられ、使われている。なお、情報や知識は、全く当り前の用語で殊更に定義する必要はないのかも知れない。

ここでは、あえて20周年であることから、これからの10年、20年をみて、情報とは何か、知識とは何か、また情報知識とは何かという初心を整理しておいてもよいように思う。

さて、他分野などではどうだろうか。情報を冠する学問分野や学協会などは多く、これら分野で独自のとらわれ方がされている。ただ、やはり通念としての情報や知識という用語が前提となっていて、本質的な定義は余り明確で

はないように思われる。

3 情報知識を調べる

少し調べてみる。ここでは、知識の源泉は情報であると考え。「情報」とは何かを問うものとする（以下、便宜上命題という）。

人間文化研究機構[1]にある人文科学における研究資源共有化システムを使う。何か知識が得られないだろうか。共有化対象データベースは、2008年9月現在で、国立歴史民俗博物館、国文学研究資料館、国際日本文化研究センター、総合地球環境学研究所、国立民族学博物館の5機関で（以下、それぞれ歴博、国文研、日文研、地球研、民博という）が持つ、104種である。

また、これらは6種類のカテゴリに大別されている。所蔵資料目録、本文・フルテキスト、画像・映像・音響、所蔵図書・雑誌目録、研究文献目録、および事項・ファクト（以下、適宜略記する）である。

「情報」と「知識」の語源からみてみよう。統合検索システムの全項目検索（any）で「情報」を入れてみると、33種のデータベース（以下、DB）がヒットした。レコード数では20,278件である。内訳は、歴博13DB中1,382件、国文研11DB中3,728件、日文研3DB中35件、地球研2DB中397件、民博4DB中14,736件である。

一方、カテゴリ別では、資料目録9DB中1,370件、フルテキスト1DB中8件、画像DBはヒット無し、図書等目録5DB中10,625件、文献目録10DB中8,237件、ファクト8DB中38件である。

検索結果 33DB を通覧してみると誠に興味深い。大半の 25DB が目録などの 2 次情報系 DB, 残り 8DB が事項などの 0 次情報または 1 次情報系 DB である。検索結果 2 万レコード余を全て精査したわけではないが, 「情報」の語源に関わるレコードは得られなかった。ただし, ファクト系 8DB 中 38 レコードには, 「情報」の用例がいくつかある。これについては後述する。

人文科学における情報の概念を探す試みは, これらの情報源からは得られそうもない。当り前ではあるが, これが分った。

何故か。理由はいくつか考えられる。

1 つは, これらのデータベースは人文科学分野の一般的学術用語や概念を規定していない。所蔵資料などに関わるデータベースを除いて, 大半が研究機関などに所属する研究者が個々の専門領域で独自に構築した専門データベースである。つまり, この命題に解を与えるデータベースは, この研究資源共有化データベース群にはないことになる。

すなわち, まだまだデータベースは不足している。翻って, 生涯教育や教育研究に活用できるおよび活用すべきデータベースとしては, 質量共に圧倒的に不足している。理由は, これらを作る諸々の環境が未整備なことに尽きる。例えば, 作っても評価されないなども大きな要因の 1 つ。

2 つ目は, メタデータにあるかも知れない。

この統合検索システムでは, 各データベースの項目を DCMES (Dublin Core

Metadata Element Set) に基づき, マッピングし構築されている[2]。その全項目 (any) では, 恐らくタイトル, 主題, 内容記述項目辺りのキーワードからヒットしたケースと考えられる。つまり, この命題の意図する事項としてのヒットかどうかを推定することは難しい。

そこで, 絞り込みを行う。そのための検索項目は 6 種類用意されている。ここでは, ファクト系として「人・物・時・所」検索を使う。メタデータとして, Dublin Core を基に, 人, 物, 時, 所の 4 項目にマッピングされている。その「物・事」項目に, 「情報」を入れる。なお, 他の検索項目は, 「名称・作者・主題」, 「詳細」, 「Dublin Core」, 「時空間」がある。

検索結果は, 18DB, 898 件に絞られた。ファクト系 DB も, 6DB 中 10 件となった。

この統合検索システムでは原データベースに辿り着ける。例えば, 土偶 DB (歴博) 中 1 件ヒットした。原データベースの内容は, 関連資料としての掲載紙名称中の「…文化財情報…」によるものであった。また, 近代文献情報 DB (国文研) 中 1 件ヒットした。明治期の広告書「情史抄」中の記事である。1879 年 (明治 12 年) 4 月 14 日の東京日々新聞の広告記事で, 「……○情報……」という用例がある。残念ながら, 記事の全文ではないので詳細は不明であるが, 現在のところ「情報」という用語が使われた最初期の事例でもある (研究資源共有化システムにおける)。

さて, ヒットしたファクト系データ

ベース 18DB のうち残りの 12DB 中 888 件は、文献資料などの目録である。タイトル中に情報という語を含むケースである。例えば、日文研の「日本研究」DB では、タイトル「……西洋舶来の書籍情報と徳川日本……」などが典型例である。また、国文研の「日本古典籍総合目録」DB では、11 件のヒットがあるが、例えば「下田米艦情報書（安政元年）」や「京都江戸諸国事情情報知録（元治元年）」は面白い。いずれも統一書名であり、現在の名称付与かも知れない。とくに、後者のヒットは情報と言う語のヒットではないが、知的な興味が湧く例だ。

ついで、参考のために書誌的検索である「名称・作者・主題」検索の結果を示しておく。題目などに「情報」があるものは、18DB、6,293 件あった。内訳は、歴博 7DB 中 933 件、国文研 4DB 中 1,215 件、日文研 2DB 中 5 件、地球研 2DB 中 199 件、民博 3DB 中 3,941 件である。

この結果にはこれ以上立入らないが、全項目検索の約 3 分の 1 に絞られている。

4 これから

たいへん残念であるが、上記いずれのデータベースも簡単な索引的な解説はあるものの、原資料や原データそのものをもっていない。したがって、この命題のような問合せには完全には答えられない。そのような深みのある検索技術（例えば、DB 連携の強化、横断検索よりも縦断検索など）の整備が強く望まれるところである。

これらのデータベースでは、明治期以前のレコード中に情報という語はヒットしない。確かに、情報は使われていないようだ。つまり、無かったと考えられる。

情報は、よく知られているように、明治初期に Information の訳語として作られた。本来軍事用語である。「状報」なども書かれ、当初は諜報の意味で使われた。この語が現在の意味でいつ頃からどのように使われてきたかを知ることは興味深い。用例探しも含め、探求は今後の課題としたい。

参考のため、「知識」と「情報知識」の検索結果を示しておく。全項目検索で、前者は 23DB、2,837 件ヒットし、後者は 3DB、5 件ヒットした。主として、雑誌名などによる。

人間文化研究機構の研究資源共有化システムを使って、どこまで知識を得ることができるか試みをやってみたが、検索とその結果の分析はまだ不完全である。希望としては、データベースの充実、とくに事実データベースが要る。百科事典的な事項や原典テキスト、テキストデータなどの充実が肝要であろう。

参考文献

- [1] 人間文化研究機構の統合検索システム：<http://www.nihu.jp/>
- [2] 人間文化研究機構：NIHU DCメタデータマッピング規則他，2008.3
- [3] 安永尚志：巻頭言「知識の源泉は、…」，情報知識学会誌，18，1，pp.1-2，2008.2